



おすすめの一冊

渡辺 決『検診で見つかるがんの8割は良性がんである』

著

著者は泌尿器科の専門医として、前立腺がんの診療・研究に心血を注ぎ、早期発見のため超音波装置の開発などに先進的に取り組んでこられました。その後PSA検査の普及により、前立腺がんは容易に早期発見が可能になりました。

PSA検査の普及で前立腺がんを早期に発見し治療すれば死亡数も減少することが期待されましたが、実際には発見数は飛躍的に増加したものの、死亡数もむしろわずかに増加しています。さらに前立腺がん以外の疾患で死亡した患者さんの病理解剖を行うと、30%前後に生前には認識されていなかった微小ながん(ラテントがん)が前立腺に存在することも明らかになりました。

そこで著者は病理学的に診断されたがんを、本人の生命予後に関わらない「ラテントがん」、検診で発見できるが極めて生長^{*}の遅い「良性がん」、一

検診で見つかるがんの8割は良性がんである

過剰診断時代の
予防がん学

渡辺 決

Hiroki Watanabe



検診で見つかるがんの8割は良性がんである
渡辺 決 著
晶文社

般的な生長速度で検診が有効な「悪性がん」、極めて生長が速く検診の間にも進行がんになってしまいう「電撃がん」の4種類に分類できるのではないかと提案しています。

そして、検診に新しい技術が導入されると、診断率は飛躍的に上昇するものの、その増加分の大半が著者の言う「良性がん」であり、「悪性がん」や「電

撃がん」の頻度は変わらないので、なかなか死亡数の減少につながらないのではないかと考えました。

これは主に前立腺がんへのPSA導入から導き出された考えではありませんが、著者自身も肺がんCT検診を受けて、現在では経過観察になるであろう微小な陰影を指摘されて切除を受けた経験から、他のがんについても存在す

るのではないかと主張しています。

検診発見がんの8割が「良性がん」というのはややオーバーな表現ではありませんが、どの部位でも「良性がん」が皆無でないことは確かと思われます。したがって、著者は「意図的監視」というシステムを提案しています。これは異常所見を見つけても直ちに侵襲的な治療を行わず、慎重に経過をみることで著者の言う「良性がん」か「悪性がん」かの鑑別を行うおうというシステムです。

また一方で、著者は「電撃がん」や「悪性がん」には確らないことが最も重要であることを最後に強調しており、そのためには「禁煙」、「ピロリ菌除菌」、「節度のある性生活」などが重要としています。

生活習慣等の改善と検診はがん予防の基本ですので、健康診断に関わる皆様にはぜひ一読されることをおすすめします。

金子 昌弘

かねこ まさひろ

東京都予防医学協会学術顧問、国立がん研究センター中央病院内視鏡部部長を経て東京都予防医学協会前健康支援センター長。がん検診、特に肺がんCT検診の開発、普及に努める。

^{*}がんの増大に関して、著者はあえて「生長」と記載していますので原文のままにしています。